

司馬遼太郎



街道をゆく二十九

街道をゆく

司馬遼太郎

朝日新聞社

昭和六十二年九月三十日 第一刷発行

街道をゆく 二十九

定価 一三〇〇円

著者 司馬遼太郎

発行者 八尋舜右

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地 五十三十二
電話 〇三―五四五―〇一三一(代表)
編集・図書編集室 販売・出版販売部
振替 東京〇―一七三〇

©司馬遼太郎 一九八七年

ISBN4-02-255549-1
Printed in Japan

街道をゆく

二十九

本書には「週刊朝日」昭和六十一年九月二十六日号・連載第七百四十三回から、六十二年四月十七日・第七百六十九回分までを収録。

目次

秋田県散歩

東北の一印象

象潟へ

占守島

合歡の花

7

21

35

49

一 茶

覚 林

植民地？

菅江真澄のこと

旧奈良家住宅

寒風山の下

海辺の森

鹿 角 へ

狩野亨吉

昌益と亨吉

63

77

91

105

119

133

147

161

175

189

ふるさとの家

203

湖南の奇跡

217

蒼龍窟

231

飛驒紀行

飛驒のたくみ

245

飛驒境橋

261

春慶塗

277

左甚五郎

293

山頂の本丸

309

三人の人物

325

国府の赤かぶ

339

古都・飛驒古川

355

金銀のわく話

371

飛驒礼讃

387

題字 棟方志功

え 須田翹太

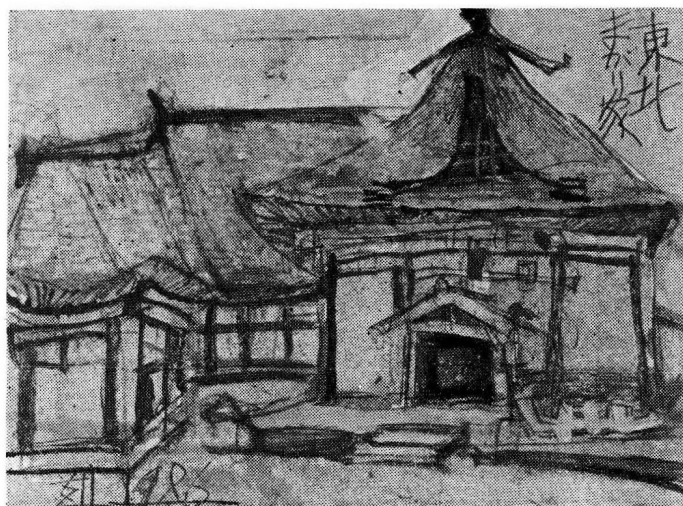
装幀 原弘

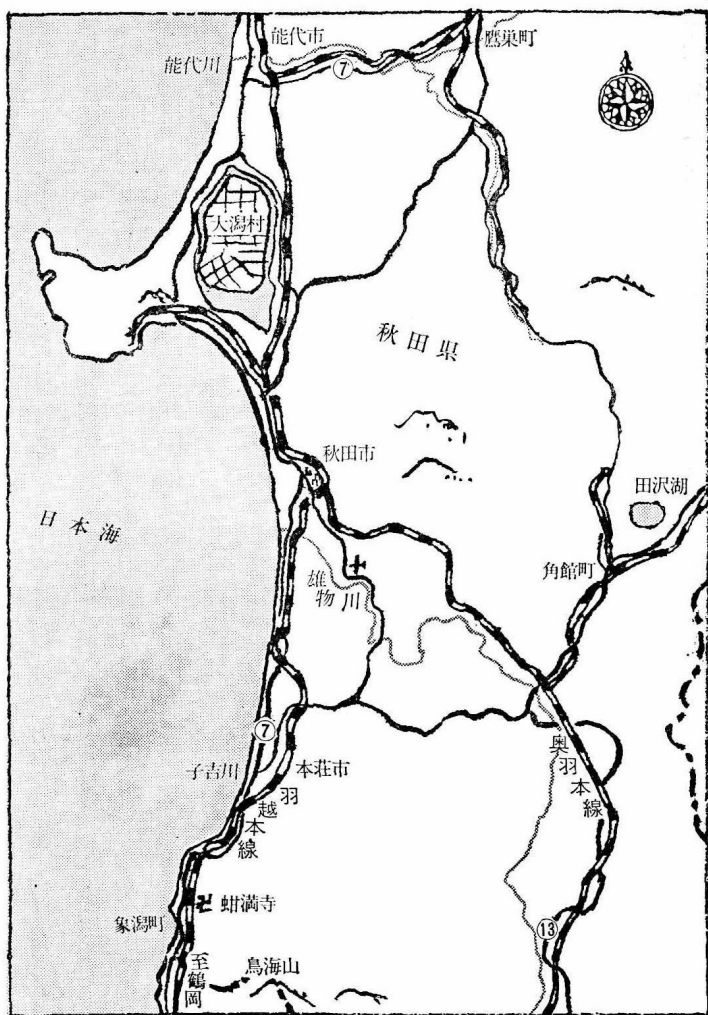
地図 熊谷博人

東北の一印象

秋田県散歩

一





ひさしふりで東北の山河や海をみたいとおもったが、どこへゆくというあてはない。

津軽は、かるがるとした気持ではゆけそうにない。

南部（岩手県）は日本の近代史にとって重要な地である。その一部の八戸（はちのへ）（明治後南部からきりはなされて青森県に入れられた）にはすでにこの旅で行った（第三巻）。

宮城県も同様である。仙台とその付近を歩いた（第二十六巻）。

いちど、ゆっくり会津盆地（福島県）を歩いてみたい。ただ会津については小説のなかでずいぶん書いてきて、会津人たちの^{あしおと}足音まできこえてきそうである。行けば自分にとっての歳月が逆行してくるにちがいない、それは楽しくはあるが、^{けだる}気^{だる}懶^{だる}くもある。

「会津は、東北じゃないんです」

と、むかし井上ひさし氏がいわれたことがある。むろん東北の本質を相手に悟らせるための修辞ではあるが。

会津は——いうまでもないが——地理的には東北である。しかしその伝統文化や住民の意識は中央だということであろう。

かといって井上さんは東北を、中央に対置される一地方とみていない。古代以来ふかふかと堆積した独立性のつよい文化をもつ地帯であると考えている。

といって、井上さんはその文化的独立性とはなにかということとは、あからさまに言うことをしないのである。

いくつかの理由が考えられる。

一つは、お国自慢はいやしいという感覚である。奥州・羽州には、しばしば、人間の蒸溜酒^{リキリ}とおもわれるような人がいる。高度の市民感覚というか、精神の貴族といった感じの人格で、井上ひさし氏は、気の毒なことに、そういう部類に属する人ではあるまいか。

ともかくもそういう類いの人の口から、即物的なお国自慢は出てきにくいのである。名作『吉里吉里人』(新潮社)は、いわく言いがたい文化的独自性を、ことさらに戯作めかしくして展開されたもので、そのくせ一点のお国自慢も出て来ない。まことに高雅としか言いようがない(吉里吉里国をもし九州とか信州とかに設定されたとすれば、どうしてもお国自慢が出て、高雅さというものが出ないのではないか)。

東北人にしばしば見られる高度の市民感覚とか、精神の貴族性といったものは、説明しがたい。せいぜい実例でもって察してもらわねばならない。

以下、明治・大正・昭和に出た知名度の高い東北出身者たちから、共通のにおいを嗅いでもらうことにする。

陸羯南^{くがくなん}(一八五七～一九〇七) 青森県。

明治の言論人。新聞『日本』の主宰者。その新聞は、政治を論じつつも政治の現場から超越し、不偏不党をかけたつつ、しかも新聞は商品にあらずという立場をつらぬき、羯南の

死とともにつぶれた。社員正岡子規の死までの保護者として知られる。子規はこの人のことを思うと、つねに涙が出たという。ロンドンの漱石への手紙の中に「コレハ涙ナリ」と自分の涙痕を墨でかこみ「徳ノ上カライフテ此様ナ人ハ余リ類ガナイト思フ」と書いている。容貌秀^{えい}穎^{てい}。

原敬^{はらたかし}（一八五六―一九二一）岩手県。

明治の言論人。のち官界に入り、ついで藩閥を打倒すべく政党政治家になり、大正七年（一九一八）政党内閣による首相。「平民宰相」とよばれた。同十年、東京駅頭で一青年のために刺されて死亡。早くから殺されることを覚悟し、その妻に遺言するところがあった。生前、いっさい爵位をうけることを拒^{こは}んだが、遺言状にも「死後、位階^{いはい}勲等^{いこうとう}の陞叙^{しょうじょ}、授爵^{じゅくわく}」などは受けてはならないとし、葬儀も東京でせず故郷の盛岡ですることを規定した。墓碑もただ「原敬の墓」とのみせよ、と命じた。かれは戊辰^{ぼしん}戦争によって「朝敵^{あそく}」の位置に追いこまれた南部（岩手県）人の意識でもって終始し、無冠の南部人として葬られることをのぞんだのである。

死の日のワイシャツは盛岡の記念館に保存されているが、濃紺のふとストライプが入っていて、とびきりハイカラなものだった。当時、原敬ほど容姿・精神においてハイカラの似合う人物はすくなかった。

高橋是清（一八五四～一九三六） 宮城県。

財政家。幕末、仙台藩の留學生として渡米し、奴隸に売られたりし、辛酸をなめたが、後年、そのことを陽気に語り、およそうらみというものを藏さなかった。帰朝後、予備校（当時もあった）の教師などをし、のち官界に入り、財政畑をすすんだ。ほとんど名工というべきその練達の財政手腕は長期にわたって珍重された。昭和二年（一九二七）のパニックのときも請われて蔵相になった。健全財政主義を守り、全存在でもって軍備拡張主義（当然、インフレになる）の軍部と対立し、このため二・二六事件で殺された。

まことに善良そのものの風貌で、のんきそうでもあり、どこかダルマに似ていた。昭和二年のパニックのときも「ダルマさんが出てきたら大丈夫だ」と庶民のあいだでささやかれたりした。

狩野亨吉（一八六五～一九四二） 秋田県。

明治期の非専門的な大知識人。

ぼう大な図書の収集家でもあった。和本の一部が東北大学図書館にあるが、一種の国宝という人もある。

亨吉が、古本屋から、当時、ひとびとの記憶になかった江戸中期の思想家安藤昌益を発掘

したことはよく知られている。

病的なほど俗欲がなく、その上妻を持たず、修道士のような生涯を送った。俸給はすべて書籍を買うことについてやされた。もともと天文・数学を専攻して、のち文科系の学問をしたが、文科系の学問についても、その研究態度が徹底的に科学的だった。第一高等学校の校長のあと、明治三十九年に開設された京都帝大文科大学長（学部長）になり、このあたらしい大学の学風をつくった。

内藤湖南（一八六六—一九三四） 秋田県。

明治の新聞論説筆者。四十二歳、明治四十年、狩野亨吉にまねかれ、初期京都帝大教授（最初は講師）。

学歴は秋田師範学校卒だけである。

湖南は、明治末年、在来の漢学を一変させて、人文科学的なシナ学に仕立てた唯一ともいふべき先唱者で、学問の底辺がひろく、つねに新鮮な仮説をもち、かつ堅牢に実証した。その史学を越える人はいまなお出ないといわれる。

あかるい人柄で、文章も明晰そのものだった。その好奇心は日本史にも及び、江戸期のもっとも重要な人文思想家ともいふべき富永仲基（なかもと）の存在を発掘し、しかも自分が発掘したことを忘れてしまうほどに功名心がすくなかった。

湖南の学問的器量は、その後の京都大学の東洋学研究に圧倒的な影響をあたえた。

以上のひとびとをみるとさまざまな共通の印象がうかぶ。透きとおった伶俐さ、不合理なものへの嫌悪。独創性。精神の明るさ。独立心。名利のなさ。もしくは我執からの解放といった感じである。明治の薩長型のように、閥をつくってそれによって保身をはかるところがいっさいない。

井上ひさし氏とのやりとりにもどす。

くりかえすが、このことは十年以上前、氏と雑談したときの記憶にもとづいている。話が、昭和史に登場する著名な東北人ということになった。

私は、米内光政（一八八〇～一九四八）の名をあげた。米内は推されて海軍大臣や総理大臣になったこともあるが、そういうことよりも、代表的な海軍軍人という印象がつよい。

私は海軍のことを知らないが、古い兵科の士官や、短期教育で技術科、軍医科や主計科の士官になった人の話をきくと、その精神教育は、

——海軍士官はスマートであれ。

という一点に尽きるらしい。とくに速成教育で士官になるひとびとはこのひとことに感動し、生涯海軍びいきになってしまうという。